る。

頼泰が豊後に下向して、早や二十一年の歳月が流れ、二度にわたる元寇の合戦、又困難な戦後処理と、尚続く警固番役の問題、東方鎮西奉行として骨身にしむ苦労を重ねて来たのであるが、それにしても此の頃、北条氏一門が探題はじめ所領所職に侵出しはじめたことは余りうれしいことではなかった。

隠居して、度々常楽寺を訪れ、またここに滞在する時が最も自由で、過去の追憶をたどる好い時間であった。隠居寺常楽寺からは、真向いに高崎山や別府、雲の果てに太宰府も指さすことができた。

稲日野も行き過ぎがてに思へれば
心恋しき可古の島見ゆ（万葉歌）

しかし、困難を乗りきった国史上の人物が、老残の身をいたわった霊山の地で、最後に与えられた永遠の棲家は土饅頭一つであった。

（つづく）

佐伯地方の石塔（一）

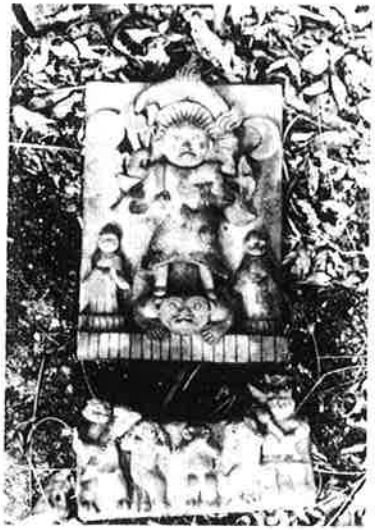
五十川　千代見
（会員・弥生町提内）

一　瓦塔

江戸期には、弥生町大字門田字須平には瓦師がいたが、いつ頃から瓦焼を始めたのか、いつ頃まで続けられていたのか不明である。屋根瓦だけでなく仏塔なども作られていたようである。

瓦製は壊れやすいために現在残っているものは僅かである。先日須平地区の旧墓地を歩いてみたが、瓦製の壊れた墓石が一基と仏塔二体を見かけた。ある家の人に瓦焼の話をすると、うちにも荒神様があったが新築してか

瓦庚申塔　（一）



瓦庚申塔　（二）

ら行方不明とのことであった。

瓦焼で作られた塔は他所にも少く特異なものなので、一応瓦塔と名付けて紹介を試みよう。

二　瓦庚申塔

所在地　弥生町須平　向山田

総　高　一米十一糎

造　立　文化十四年（一八一七）丁丑十一月二十日

作　者　当村　瓦師　長右衛門　七十五作

本　尊　青面金剛像（六手）

本尊の持物　・宝珠・三叉鉾・弓・矢・宝剣・にわとり

髪は聳立（しょうりつ）　天邪鬼を踏まえる　日天　月天

童子二人　夜叉二人　三匹の猿（見ざる　言わざる　聞かざる）

庚申塔は台座ともに五個に分けて製作されて、それを組立てて建てられている。年号は尊像の表面と裏面の二か所にある。製作技術も優れている。

瓦庚申塔は非常に珍らしいもので、筆者は寡聞にして全国的にまだ発見された報告を聞かない。ご存じの方の御教示を頂ければ有難い。

三　瓦笠付形角柱塔

所在地　弥生町須平
総　高　九十糎
台　座　蓮弁（正面のみ）
正　面　飯元願應定生信士　（飯は帰の俗字）
側　面　天明元丑年（一七八一）十二月十九日

瓦笠付形角柱塔

須平地区の奥の方の金田家の墓地にあり、この写真は十年程前に撮ったもので、現在は笠と台座が壊れて、塔身だけが古い墓石と共に一カ所に残されている。

四　瓦地蔵塔

所在地　弥生町久土　薬師庵前庭
総　高　一米二十三糎（本体三十三糎）
正　面　本光玄覺居士
造　立　寛延庚午（一七五〇）　二月十四日

瓦地蔵塔

合龕（がん）の中に安置され、台座は二段で地蔵尊だけが瓦焼である。

以前は人の墓であったのが、いつの頃からか信仰の対象となり、村の人々は首から上の病を治す地蔵様として信仰し、地蔵様の廻りには穴のあいた耳の病気を平癒祈願する小石が納められている。

久土地区は須平地区の隣りであり、恐らく須平の瓦師の作られたものだと思われる。

（つづく）

佐伯時代の独歩の手紙（中）

山内武麒
（賛助会員・佐伯市城下東町）

明治二十七年の一月十五日に中桐確太郎に宛てゝ手紙を出してある。その内容は冬季休業中、帰省して見聞したこと及び熊本旅行のことを報らせてある。

先ず、新年来り旧年去り目出度存じ候と新年の挨拶をして、一昨夜帰って君からの十二月二十七日付の手紙を受取ったと礼を述べて旧年二十五日佐伯を出発して帰省し、正月三日に国元を出て熊本に行き、久しぶりに高木正雄君と遇って快談し、また水谷君を訪うなど都合五日間熊本に滞在して十日帰路につき、九州の中央を横断して三十六里の路を、二十九里徒歩で帰り、途中阿蘇山に登り、噴火口の荒寥として而も偉大で崇高な光景には強い感懐を抱いた。と熊本旅行のことを報告してある。

この旅行日数は二十日（十二月二十五日から正月十三日まで）であって、父母の下で笑ったり泣いたりして、また少女たちの家を訪ねて久しぶり語ったり、炉を囲んで村の悲哀を聴いたり、一家零落の跡を弔うて心を痛めたり、屠蘇一杯の酔に乗じて村長たちと政治を論じたり、太宰府天神宮を見物して歴史を考えたり、噴火口